

記念講演

「読むこと、見ること、生きること —文学／アートとの出会い」
(講師 原田マハさん)
を観覧して



今年の記念講演は、美術の世界で活躍され、『楽園のカンヴァス』、『ジヴェルニーの食卓』では美術の世界を描くなど、アートと文学に造形の深い、原田マハ先生にお越しいただきました。

原田先生の『楽園のカンヴァス』が、「埼玉県の高校司書が選んだイチオシ本2012」の第1位に選ばれたことがご縁となり、今回の講演をお引き受けくださったそうです。

イチオシ本については、発表と同時に県内各地の書店でイチオシ本フェアが行われたのをご覧になった方も多いと思います。

原田先生も「たぶん『楽園のカンヴァス』は埼玉県が一番売れたんじゃないかな(笑)」なんておっしゃっていましたが、こうやって本を通じて人と出会い、ご縁が広がっていくのも、本の持つ魅力のひとつですね。

今回の講演を通じて、原田先生は、『出会い』をととても大切にされている方だと感じました。

人生には様々な『出会い』があり、それを原点に、あるいは転換点にして、新しい人生が拓けていく。そういった『出会い』を繋ぐ場のひとつとして、今回の記念講演をお引き受けいただけたのかもしれない。

原田先生のお話は、「アートと文学のある人生でよかった」という言葉から始まりました。

子供の頃の原田先生に大きな影響を与えたのは、ご両親。美術書のセールスマンだったお父さんのお陰で、ビジュアルに触れる機会の乏しかった時代にも毎日アートに触れていたとか。3歳のときに会った『モナリザ』は、先生のアート人生の大原点だそうです。



ご両親は、美術展に行くこと、本を買うこと、映画を見ることの3つだけは、何も言わずに必ず希望を叶えてくれたそうで、そんな環境があったからこそ、小さな頃からアートや文学に親しめていたんですね。

子どもの頃に出会って印象的だった文学として原田先生が挙げられたのは、宮沢賢治の『よだかの星』や、ヒュー・ロフティングの『ドリトル先生シリーズ』。

『よだかの星』は、あまりに好きすぎて、なんと小学生のときに漫画化してしまったのだとか。『ドリトル先生シリーズ』についても、作者のヒュー・ロフティングや、翻訳者の井伏鱒二のことを熱く語っていただきました。

一方、アートについても、10歳のときに会ったピカソの『鳥かご』から始まり、竹

宮惠子の『風と木の詩』、ピカソの「人生」、東山魁夷の「道」、「緑響く」、アンリ・ルソーの「田舎の結婚式」、ピカソの「盲人の食事」など、先生がこれまで出会ってきた作品について、愛情たっぷりのお話がありました。

『風と木の詩』が『楽園のカンヴァス』や『ジヴェルニーの食卓』の原点であったことや、落ち込んでいたときに『盲人の食事』と出会って思わず涙をこぼしてしまったときのエピソードなど、ここには書ききれないほど、たくさんの印象深いお話がありました。

最後は、『楽園のカンヴァス』の制作秘話。21歳のときアンリ・ルソーに出会ってから、実に30年近い構想期間を経て『楽園のカンヴァス』が出来上がるまでのお話です。それによれば、先生の考えたタイトルは、『楽園のカンヴァスに抱かれて眠る』だったのだとか。

小説家になる前から、ルソー生誕100年の2010年に、ルソーの小説を書きたいと考えて、実際にそれを成し遂げた原田先生。そのお話をきいて、先生の持つ《縁》というものをしみじみと感じました。

先生の《縁》を感じる印象的なエピソードが、『楽園のカンヴァス』が出来上がったことを、ルソーに報告しに行ったときのお話。

先生は『楽園のカンヴァス』が出来たことをルソーに報告するために、ルソーの出身地であるラヴァルを訪ねます。お墓に本を供え、そのまま置いて帰るつもりだった先生ですが、それでは雨に濡れて汚くなってしまうということで、気持ちだけ供えて、本は持って帰ることに。ところが、帰ろうとしたそのときに、先生は、ルソーのお墓の隣に前回来たときはなかった小さな青空図書館を見つけたのです。

それは市民が自由に本を持ち寄る形式の、出来たての図書館で、先生は無事、図書館に本を置いて帰ることができたということです。

『楽園のカンヴァス』を供えに、ルソーのお墓まで行ったら、お墓の隣に新しく図書館

が出来ていたなんて、これはもう《縁》だと思えません。

こうして『楽園のカンヴァス』が図書館に収められたところで、講演の幕が閉じました。

文学とアートに彩られた、あつという間の時間を堪能させていただきました。

原田先生、本当にありがとうございました。



原田先生への花束贈呈。

贈呈者は、原田先生の大ファンである春日部女子高校3年生の本田真帆さんにつとめていただきました。



原田先生の著作展示を先生ご本人にもご覧いただきました。